中京大学体育学論叢　36-1，15-26　1994

雑誌『児童研究』における遊戯論に関する一考察

高　橋　春　子

A Study on the Theories of Play in the Jounal of "Jidō Kenkyū"

Haruko TAKAHASHI

Abstract

The purpose of this study is to investigate the articles related to play and education through play in the Journal of "Jidō Kenkyū" (Child Studies), which was first issued in 1898 and discontinued in 1943, and to analyze the theories on play and education through play promoted mainly in the thirties of the Meiji Period, and to clarify the influence of those theories on the development of education as well as on that of physical education.

The results of this study are summarized as follows :

(1) The articles written by Kojiro Matsumoto, Heizaburo Takashima, and Sozo Kurahashi are noted as influential ones.

(2) The articles had the modern thought of children in common which was asserted by John Locke, Jean Jacques Rousseau, etc. and that one should treat a child as a child and that play has the important value in the development of children.

(3) Those theories also taught that play gives one pleasure, and this recognition seemed to lead teachers to find another way for physical education classes, which was different from the disciplinary instruction present in gymnastics.

(4) In connection with the revised Imperial edict on elementary school in 1990, elementary school teachers were highly interested in play education. They felt the need for a theoretical basis of education when the scholars originating child studies in Japan were about to provide those theories.

(5) The journal also ran the teachers' reports on the true state of play and the curricula of play education in the schools and communities and thus it encouraged the teachers' studies of play education and contributed to its development.

(6) It is recognized that 'Taiso-Yugi Torishirabe Houkoku' (a school physical education reform plan recommended by the Committee for the Investigation of Gymnastics and Play, which was organized by the Ministry of Education in 1905) highly evaluated play and games as teaching materials for physical education class and that H. Takashima played an important role in the report. Generally speaking, however, many scholars and teachers interested in play who reported and read aricles in the journal

seemed to have an influence on the report by the Committee as well.

1．はじめに

『児童研究』という誌名をもつ雑誌が，明治31年から昭和18年まで発行されていた。各巻10～12号より成り，総巻数で41巻に渡り，通して489号を数えた長寿の雑誌であった。これの復刻版が第1巻～第10巻は昭和54年7月20日，第11巻～第20巻は昭和54年11月20日，第21巻～第30巻は昭和55年2月20日，第31巻～第41巻は昭和55年6月5日に出版されている。『児童研究』は当時の児童心理学者たちが児童教育の啓蒙を企図して発行したもので，発行所ははじめ教育研究会，後に児童研究会，さらに日本児童学会というふうに改まっている[1)]。

『児童研究』は児童学研究とその応用としての教育の問題について広範囲の話題をとり上げ，体育関係，遊戯関係についても論説・解説記事・研究論文・研究実例発表・質疑応答コーナー，あるいは新刊書の紹介等といろんな形式で掲載されている。なかでも，高島平三郎の執筆したものがきわだって多い。『児童研究』は内容的にみても体育論・体育関係記事・遊戯論・遊戯関係記事も多く取り上げている。しかし，このことは，従来体育・遊戯の立場からは殆んど注目されてこなかったところである。

当時の教育界，体育界との関係で考えると，この雑誌が教育の実際，体育の実際に影響を及ぼしたことが十分考えられる。そこで本研究は『児童研究』にどのような遊戯関係の論文が掲載されていたのか，またそれらの論文はどのような主張をしていたのかを明らかにして，この雑誌の果した役割とそこに見られた主張の意義を考察しようとするものである。体育関係の論文についての考察は次回に行うことにしたい。

2．雑誌『児童研究』の発刊について

明治31年11月3日の天長節に創刊された第1号の発刊の辞に，「就中児童心理学の如きは其発達最も速にして独に仏に英に米に或いはより生物学上より或いは生理学上より或いは解剖学上より熱心に之を研究し終に単に心理学の名に満足せずして児童学の新名称を付与し児童の心身全体に関する研究を創むるに至れり」として先進諸国の現況を概観し，つづいて「我国教育界の気運をして欧米と駢馳して恥ずる所なく能く自国の児童に就きて実際の経験観察を重ね之を欧米のものと比較して其異同を明らめ以て国家教育の基礎を置くべき確実なる根拠を得しめんことを期し」と発刊の狙いを表明している[2)]。

児童研究の権威元良勇次郎は，この雑誌の発刊に祝辞を寄せ，「我国維新以後百事西洋各国の思想を輸入し教育の如きも西洋の例に倣ひたるなり是開国の当時止むを得ざるの事情にして斯の如くして吾人を益したる事少からず然りと雖も今や教育の事情整ひたり今後益々其発達を謀らんとするには必ず本邦人の性質を明にし之に応じて教育の道を講ぜざるべからず本邦人の性質を明にせんとするに於ては児童の研究は其最も大切なるものなり」と述べ児童研究の必要性を教育発達の前提としこの雑誌への期待を表わしている[3)]。

この元良勇次郎の祝辞によって『児童研究』発行の中心となった心理学者が高島平三郎，松本孝次郎，塚原政次の三人であったことが分る[4)]。

巻頭の論説も児童研究の必要を論じ「恐らくは新教育学なるものが児童研究の上に建設せらるゝの期あらんと信ずるは決して迷妄の期待にあらざるべし」[5)] と述べ，児童研究が教育学の基盤となる研究として充分に期待される分野であるとしている。この論文はまた「幼児の保育は，如何なる心理上の基礎によりて行ふべきものなるか，……如何なる家庭の教育が児童の発達にとりては尤も適当なるものなるか等の問題に向ひて，確実なる指導を与ふるものは，これ児童研究の外ならざるべく，」[6)] とも云い，児童研究の実際面での効用も挙げていた。

このような抱負と期待を担って発刊された雑誌『児童研究』は実際の児童教育，とくに体育

にどのような役割を果たしたものであったかを体育における遊戯の取扱いの問題という観点から以下において考察していくことにする。

3．雑誌『児童研究』における遊戯関係論文について

(1)　教育研究所発行時代

明治31年に発刊された雑誌『児童研究』は，さきにも述べたように明治35年まで教育研究所が発行所となっている。本雑誌の草創時代で遊戯論文，遊戯関連記事も多数かつ多岐に渡っている。表1にこの時期に掲載された論文名（記事題目）を一覧表にして掲げた。

表1　教育研究所発行時代の遊戯論・遊戯関係記事

執筆者	論文名（記事題目）	分類	巻号	発行年月日	頁
				明治	
大草重正	遊戯に関する疑義	雑録	1．1	31.11.3	46～47
高島平三郎	右に対する意見	〃	1．1	〃	47～48
	遊戯と教育	適用	1．3	32．1.3	27～28
田中誠森	日曜日に於ける児童の調査	紹介	〃	〃	40
松本孝次郎	遊戯及び玩具	研究	1．4	32．2.3	4～7
木村忠次郎	児童の遊戯	〃	1．5	32．3.3	12～16
	遊戯及び玩具に関する研究	研究法	〃	〃	20～21
香田秀吉	研究実例（児童自由遊戯）	研究実例	1．7	32．5.3	29～30
	遊戯衛動の利用	適用	1．7	32．5.3	30～31
	児童の遊びと植物	雑録	〃	〃	45
山崎石峨	泉州地方に於ける児童の遊戯	紹介	1．8	32．6.3	36～38
田中善三	児童の好む遊戯	〃	〃	〃	38～39
	鹿児島に行はるる遊戯	雑録	〃	〃	43～44
高橋米作	児童遊戯の変遷	研究実例	1．9	32．7.3	24～26
	文学遊戯	雑録	1．9	〃	47
	幼児の遊び仲間	適用	1.10	32．8.3	26～27
小鍛治保次	越後村松町附近に於ける児童の遊戯	紹介	〃	〃	35
	聯合的遊戯	雑録	1.10	32．8.3	46～47
松本孝次郎	遊戯及び玩具の心理的研究	研究	2．1	32．9.3	13～16
	羅漢遊び	雑録	2．2	32.10.3	42～44
	幼児自身に工夫せる遊戯の種類	〃	〃	〃	49～50
	天才と遊戯と	適用	2．3	32.11.3	19～20
坪井正五郎	諸人種の子供遊びに就きて	研究	2．4	32.12.3	5～7
〃	〃　（承前）	〃	2．6	33．2.3	10～12
	学校に於ける遊戯	適用	2．9	33．5.3	32～33
	唱歌及び遊戯の時間割に就きて	適用	3．4	33.10.3	25～26
	台湾少女の遊戯	雑録	3．6	33.12.3	44～45
	正月と児童の遊戯	適用	3．7	34．1.3	23
	日本全国児童遊戯法博文館発行　―紹介―	紹介	3.10	34．4.3	31
	幼児の遊戯と母親の注意	適用	4．1	34．5.3	26
	遊戯問題に就きて	適用	4．2	34．6.3	30～31
	現今の遊戯問題	論説	4.10	35．2.3	1～10
星川清成	肥前小城地方童語及び童謡遊戯	研究実例	〃	〃	18～21
	児童と遊戯	研究法	5．2	35．4.5	17
能島正夫	気候と遊戯	研究実例	5．5	35．7.5	24～27
	新案遊戯（第1回）	体育	〃	〃	47～48
前田不二三	遊戯の心理及び生理的条件	研究	5．6	35．8.5	16～24
森岡与之助	丹後興謝郡加悦町小学校遊戯実地案	研究実例	〃	〃	28～29
	遊戯の講習について	適用	〃	〃	31
	コロッア氏遊戯之心理及教育	紹介	5.10	35.12.5	26

雑誌の形式は巻頭から順に論説・研究・研究法（研究実例）・適用・紹介・雑録等の大分類より構成され，表1の分類の項に記事が掲載された箇所を記載しておいた。これら遊戯論・遊戯関係記事の内訳をみると，論説：1，研究：6，研究法：7（うち研究実例：5），適用：10，紹介：6，雑録：9のようになっている。

注目すべきこととして，文学士でこの雑誌の創刊者の一人であった松本孝次郎が本誌の第1巻第4号に，遊戯と玩具について研究発表していることである。のちに教育問題に遊戯を関連付けていくことになるが松本の遊戯論については後述する。また第4巻第10号では論説において，現今の遊戯問題を語っているが，改正小学校令の施行にともなう現場の混乱とその原因とについて率直に論じていて興味あるものとなっている。

第5巻には体育という分類で新案遊戯（第1回）の項が出てくるが，この体育という分類項目は，第4巻第8号，9号，10号，第5巻第1号，2号，4号，5号，6号に特設されていた。これらの事実は，雑誌『児童研究』が如何に体育を重視していたかを示すものである。

(2)　児童研究会編集・発行時代

明治36年からすなわち第6巻からは日本児童研究会が編集し，この会の機関誌としての役割を持たされることになる。当初発行所も合資会社富山房となっていたが第7巻第11号より日本児童研究会が直接発行所となる。表2にこの時期に掲載された論文名（記事題目）を一覧表にしてまとめた。

編集形式も第9巻までは従来のものを踏襲していたが，第10巻で変更があり，原著・講義・摘録・雑録等の大分類より構成されるように

表2　児童研究会発行時代の遊戯論・遊戯関係記事

執筆者	論文名（記事題目）	分類	巻号	発行年月日	頁
松本孝次郎	学校教育に於ける遊戯問題に就きて	研究	6．1	36．1.25	2～9
昇直隆	薩南大島に於ける節句，儀式及び遊戯	雑録	6.11	36.11.25	28～34
若山蔵六	遊戯の研究	紹介	7．1	37．1.25	52～59
鳥居百治外八人	体育的自然の遊戯　―紹介―	紹介	〃	〃	66
	遊戯と教育	雑録	〃	〃	74
	教育応用　実験遊戯法	紹介	7．9	37．9.25	57
	幼児保育所（幼児の遊戯）	雑録	〃	〃	63
高島平三郎	遊戯の意義	研究	7.10	37.10.25	12～27
	日露戦争を応用したる児童遊戯　―紹介―	紹介	8．6	38．6.25	32
	児童期に於ける遊戯の位置	雑録	8．6	38．6.25	41
前田不二三	エジプト太古の遊戯	紹介	8．9	38．9.25	38～31
松本孝次郎	遊戯の教育的意義（上）	研究	8.11	38.11.25	6～14
〃	〃　（下）	〃	8.12	38.12.25	5～9
	朝鮮の正月遊戯	雑録	9．1	39	44～45
阪口定治磯尾岩夫	遊戯などの際鬼を定める呼び方のいろいろ	紹介	9．3	39．3.25	33～34
	有害なる新遊戯	雑録	9.12	39.11.25	49
フィエー	児童の遊戯	摘録	11．2	41．2.25	24～25
高島平三郎	遊戯発達表	叢談	〃	〃	41～42
エミイ，エリザ，タンナア述	児童ノ遊戯（高島平三郎抄）	摘録	12．6	41.12.25	213～214
ドクトルア，キューネル述笠原道夫抄	遊戯の衛生的価値	叢談	13．7	43．1.25	248～249
〃	〃　（承前）	〃	13．8	43．2.25	283～284
倉橋惣三述	児童ノ遊戯ニ就テ	原著	13．9	43．3.25	301～307
〃	〃　（承前）	〃	13.10	43．4.25	343～346
〃	〃	〃	13.12	43．6.25	416～422

表3 大正・昭和時代の遊戯論・遊戯関係記事

執筆者	論文名（記事題目）	分類	巻号	発行年月日	頁
タンナア女史述	遊戯に就きて	叢談	16. 6	大正 2. 1. 1	237～239
〃	〃 （承前）	〃	16. 7	2. 2. 1	237～239
〃	〃	〃	16. 8	2. 3. 1	280～283
〃	〃	〃	16. 9	2. 4. 1	327～331
〃	〃	〃	16.10	2. 5. 1	355～357
ノグラディー述	児童ト遊戯	摘録	17. 3	2.10. 1	105～106
ブリューフェル述	遊戯の本質及び其教育学的意義	〃	17. 4	2.11. 1	144
ウィルヘルム・ローレス述	体操，遊戯ト独逸ノ体育	〃	17.11	3. 6. 1	413
	公園，遊戯場竝に児童室の設備	雑録	〃	〃	417～418
高島平三郎述	遊戯の研究	〃	〃	〃	420～421
村尾節三述	童舞の話	叢談	20.11	6. 6. 1	349～351
蜻州生	遊戯の社会的意義	評論	22.10	8. 5. 1	214
	児童遊園	〃	22.11	8. 6. 1	287
アルベルト・ヘルウィヒ	戦争と遊戯	叢談	23. 1	8. 8. 1	21
ジョセフ・レー述	児童の遊戯の為に	抄録	23. 8	9. 3. 1	217～218
ウェーア述	児童の間暇―学校以外の運動と遊戯	〃	〃	〃	219～222
村尾節三	子供の遊び方	談叢	24. 6	10. 2. 1	159～160
〃	〃 （二）	〃	24. 7	10. 3. 1	188～189
朝原梅一	東京府下に於ける公園竝児童遊園の現状調査(1)	〃	24. 7	10. 3. 1	180～185
〃	〃 (2)	〃	24. 8	10. 4. 1	210～215
〃	〃 (3)	〃	24.10	10. 6. 1	269～277
〃	〃 (4)	〃	24.11	10. 7. 1	301～304
可児徳	舞踏の教育的価値	摘録	30. 3	15. 6.25	93
レーマン	遊戯の心理	〃	32. 2	昭和 3. 5.25	43
ウィッチ	四季の児童の遊戯	雑報	32. 8	3.11.25	207
レーマン及ウィッティ述（沼田米彦抄）	遊戯活動ト学業成績	摘録	34.12	6. 3.25	295
ヒュプシスライニンゲル	児童遊戯ノ心理	〃	36. 4	7.11.25	108
浅葉幸蔵	児童の自由遊戯の観察	叢談	〃	〃	109～110
渡辺幸江					
〃	〃	〃	36. 7	8. 5.30	237～239
リサ・ヒュプシュ	児童遊戯心理	〃	36. 8	8. 7.31	273～274
カール・ライニンゲル					
藤田勝太郎	十歳の男児の遊戯	〃	37.11	10. 7.31	392～396
赤松金芳	遊戯考（一）	〃	38. 2	11. 1.31	54～56
〃	〃 （二）	〃	38. 3	11. 3.31	87～90
〃	〃 （三）	〃	38. 4	11. 5.31	127～129
〃	〃 （四）	〃	38. 5	11. 7.31	171～174
〃	〃 （五）	〃	38. 6	11. 9.30	207～209
富士川游	古代に於ける競技的遊戯	〃	38. 6	11. 9.30	205～207
富士川游訳述	古代に於ける競技的遊戯（承前）	〃	38. 7	11.11.30	253～255
赤松金芳	遊戯考（六）	〃	〃	〃	257～259
富士川游	古代に於ける競技的遊戯（承前）	〃	38. 8	12. 1.30	295～296
〃	〃 （七）	〃	38. 8	12. 1.30	299～300
〃	〃 （八）	〃	38. 9	12. 3.28	335～337
〃	〃 （九）	〃	38.10	12. 5.31	382～383
〃	〃 （十）	〃	38.11	12. 7.31	419～421
〃	〃 （十一）	〃	38.12	12. 9.30	454～456
〃	〃 （十二）	〃	39. 1	12.11	31～33
〃	〃 （十三）	〃	39. 2	13. 1.30	68～70
牛島義友述	幼児の遊び	摘録	39. 3	13. 3.30	91～92
赤松金芳	遊戯考（十四）	叢談	39. 3	13. 3.30	97～98
〃	〃 （十五）	〃	39. 4	13. 5.31	132～134
〃	〃 （十六）	〃	39. 5	13. 7. 1	173～176
山下俊郎	幼児の遊びと性質の見方導き方	摘録	40. 2	15. 1.30	50～51

なった。掲載された内容をこの分類にしたがって仕訳けてみると，原著(研究)：7，叢談：3，摘録(紹介)：8，雑録：6，のようになっている。明治45年（第15巻）までが一時代を画するが，この間の遊戯関係論文•記事は24件と巻当り平均3件弱で前時代の巻当り8件に較べると激減している。

しかし，内容的に見るとこの時期の遊戯関係論文の方が充実した所論を展開していて注目される。まず，松本孝次郎は「学校教育に於ける遊戯問題に就きて」で学校教育における遊戯の取り上げられ方を批判的に考察し，体育と遊戯の関係や学校遊戯として備えるべき要件について論じていた。

高島平三郎も第7巻第10号に「遊戯の意義」という論文を掲載し遊戯の哲学こそ重要だとして，著名な思想家・学者等の遊戯哲学を解説している。さらに倉橋惣三は「児童の遊戯に就て」を原著の部に連載し，児童と遊戯の関連を総合的に考察し，遊戯が児童にとってその発達を助ける点で不可欠なものと結論付けている。

以上三人の遊戯論については後に詳しくとりあげることにする。

(3) 大正・昭和時代

第16巻から第41巻まで続く長い時代である。表3にこの時期に掲載された論文名（記事題目）をまとめている。

その内訳をみると，評論：2，叢談：36，摘録（抄録）：11，雑録（雑報）：3の計52件が掲載されたが，叢談には連載が多く，連載物を1件と数えると実質的には26件となる。巻当り平均1件となり遊戯の話題性が極端に低下していったことがうかがえる。海外図書の紹介も多くなり，遊戯関連の研究が児童研究の主流から離れていったことを示している。戦争体制が進展するにしたがって遊戯論も衰退していくことがわかる。遊戯はやはり平時において意義をもつものといえそうである。

(4) 松本孝次郎の遊戯論

雑誌『児童研究』には松本孝次郎の論文が計5件掲載されている。最初の論文は第1巻第4号の「遊戯および玩具」で，「遊戯は児童をして外物を支配し変化し且つ利用するに至るべき経験を与ふるものなり。而して遊戯は児童が自から快感を感じつゝ行ふ所の活動なれば，精神的発達を助くると共に，身体の発育上尤も著しき効果を与ふるものなれば，教育者が適宜に之を利用するは合理的のことなりとす。」[7] と述べ児童と遊戯の関連を余力説に拠って説明し新しい児童観に立脚して遊戯を児童教育に適用することが理に適っていると主張した。

さらに，遊戯を児童の発達段階に応じて下記の5段階に区分している[8]。

(1) 感覚的遊戯
(2) 運動的遊戯
(3) 模倣的遊戯
(4) 美的遊戯
(5) 智的遊戯

また「玩具は，遊戯を助くる所のもの」[9] としている。第2巻第1号の「遊戯及玩具の心理的研究」では「遊戯は一種の教育にして玩具は之を輔翼するの機具」[10] と述べ遊戯教育の積極論を展開した。遊戯及び玩具が児童の心的作用に及ぼす影響の大きいことを説明し，「知的作用としては観察，注意，決断等を養成するに適当なるのみならず。道徳的方面に於て克己，忍耐，自己活動等善良なる習慣を養成し得るの機会を与ふるもの」[11] と遊戯の積極的価値について述べ，さらに「団体の中に認められたる規律は之を守るの必要あるを知らしめ得べし」[12] と遊戯的教育における集団の規律を学習する効果の絶大なることを説いている。

この研究を発表した数年後に第6巻第1号で「学校教育に於ける遊戯問題に就きて」と題した論文では「他の教科に関する規定と比較するときは甚だ簡略に過ぐるの形跡を認め得る」[13] と心理学者として遊戯を述べるだけでなく，実際の教育現場の問題としてとらえ，学校教育における遊戯の具備すべき条件を次の4ケ条にまとめ適切な遊戯の選定法を述べている。それを以下に示す。

(1) 学校に於ける遊戯は必らず運動を行ふと同時に著るしく快感を経験せしむべきものに限る。

(2) 学校に於ける遊戯は必らず教育的方案の下に組織せられたるものならざるべからず。

(3) 学校に於ける遊戯はなるべく多くの準備を要せざるものなること肝要なり。

(4) 学校に於ける遊戯はなるべく団体的に之を行ひ得ると同時に，善く個人の活動の結果が明かに認めらるゝものなることを要す。

松本はまた，体操と遊戯の違いを指摘し，「遊戯は心身の二方面に向って之が発達を促すべき手段となるものにして，快感を感じつゝ活動することは休養の目的を達すべく，なほこの外に，感覚機関の働きをして鋭敏ならしめ，迅速なる決断力を養ひ，想像作用を敏活ならしめ，模倣作用を巧妙ならしむ」[14] と論述し児童中心に考え，遊戯を快感とか休養の意義においてとらえ，個人の立場を尊重し，非常にリベラルな考え方をしているところが松本孝次郎の遊戯論の特徴である。

最後に第8巻第11号・12号では，「遊戯の教育的意義」と題して児童の自然に要求する所を8箇にまとめ，この目的に向って遊戯を9項目に分類した。

(1) 感官の作用に訴うる遊戯

(2) 足の運動に関する遊戯

(3) 腕の運動に関する遊戯

(4) 複雑なる運動に関する遊戯

(5) 手および指の運動に関する遊戯

(6) 空中運動に関する遊戯

(7) 表現的遊戯

(8) 智的遊戯

(9) 勝負に関する遊戯

これをもとに遊戯教育を構成していく指針を示している。また遊戯教育の指導法についても詳しく論じ，次の9項目からなる注意事項をあげ，遊戯教育による危険や弊害の発生の回避策を丁寧に解説している。

(1) 教育者はなるべく児童と共に遊戯をなし，一方に於ては彼等を奨励し，他方に於ては之を監督すべし。

(2) 遊戯をなすときには充分熱心に勇気を出してなさしむべし。

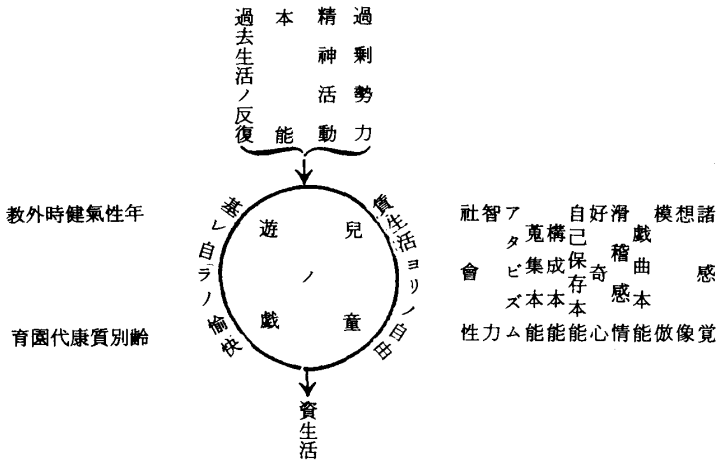
(3) 遊戯の際妄りに喧噪し粗暴なる挙動あらしむべからず。

(4) 遊戯に於て妄りに喧擾し，粗暴に流るべからざること勿論なりと雖ども亦あまりに静粛を旨とし規律を重んじて遊戯の特色たる快楽を奪うべからず。

(5) 遊戯はなるべく危険の虞なく且つ共同的性質のものを選ぶべし。特に年齢と男女とを考へてその各々に適当なるものを課せざるべからず。

(6) 遊戯の際には互ひに礼譲を守り相互の規律に服従することを養はざるべからず。

(7) 勝敗に関する遊戯は動もすれば卑劣なる



図I 児童遊戯論の主要問題関連図式

行為に陥り易き恐れあり。これ最も忌むべき所なれば，なるべく公明正大にして聊かも卑劣の手段を許容すべからざるなり。

(8) 団体を分ちて勝敗を決する遊戯の如きは相互に敵視するの念を強からしむること多く，教育者はかゝる弊害に陥ることを避くるの處置を取ること必要なり。

(9) 遊戯は往々興味の駆る所となりてあまりに熱中し，為めに過度の疲労を来すことあるべきを以て適当に之を制するが如きことも必要なり。

松本によると遊戯はこのように児童の教育に適用できる必要不可欠な活動で，単に個の肉体的心的発達に寄与するのみでなく，団体的・共同的活動の精神的訓練にも重要な役割を果たすとされるのである。こうして松本は，ジョンロック，ルソー，フレーベルらによって展開されてきた子どもを子どもとしてとらえる児童観，児童中心の思想，そこでの遊戯の教育的価値を高く評価する遊戯観などのヨーロッパの思想的伝統を受容したかたちで，児童，遊戯を論じた心理学者の一人であった。

(5) 高島平三郎の遊戯論

『児童研究』に掲載された遊戯関係論文の中で松本孝次郎の論文と同じく注目されるのは高島平三郎の論文である。高島は第7巻第10号の「遊戯の意義」の中で「遊戯は実に児童の事情であり，生命である」[15] と述べ，西欧の学者の遊戯に関する諸説を紹介するという形式で遊戯論を展開している。シルレル（シラー）の勢力過剰説，「人類の審美の情は遊戯衝動から起こった」[16] というスペンセル（スペンサー）の考え，遊戯はそれを行う人が活動の満足以外に目的を持たぬことであり，「遊戯の刺激は厭倦から起こる」[17] と云うグーツムーツの遊戯説，「幼稚園の組織は遊戯教育の組織」[18] と云ってフレーベルを紹介している。さらに，「遊戯と云う事は生活の必要以上の勢力のあふれである。」[19] とコロッツアの説を要約し，彼の立案した次の二つの教育学的原則を紹介している。すなわち，「(1)教師は遊戯を強ふべからず。(2)児童が現在の遊戯をなす事に疲れたる時に教師は常に彼等を全く休ましむるべからず。異れる種類の遊戯を行はしめん事を要す。」[20] というものであった。

高島はさらに「遊戯に依って教育を致しますれば，大なる身体上の快楽の外に真の知力上の喜びを児童に与へる事が出来ます。」[21] と付け加え，遊戯による教育の歴史を概観している。最後に「児童の遊戯は種族を保存するに必要なる本能から起った」[22] というグロースの説を紹介し，「すべて遊戯が他の運動と異るのは，いつも自分が自分の考えで，いろいろの所作をなして楽しむという点に在る」[23] と結んでいる。

この研究の成果をまとめ発展させた結果が『体育之理論及実際』で高島が担当した運動遊戯の理論の中の遊戯の意義[24] に結実していったとみられる。そこでは以上にあげてきた諸家の遊戯説に立脚して高島の遊戯論が展開されている。

高島は第11巻第2号に「遊戯発達表」を掲げたが，これはこの後明治41年10月に発行した『教育に応用したる児童研究』の中で，発達段階に応じて随意に行われる遊戯をまとめた表と同じものである[25]。

以上考察してきたように，その成果をまず，児童心理学の専門誌であるこの雑誌『児童研究』に掲載し，専門家間での検討を済ませた後に，その成果を取り込みながら洗練させ体育教育関係者も含めた広い世界に新しい遊戯論を発信していったと考えられる。

(6) 倉橋惣三の遊戯論

倉橋惣三は第13巻第9号，10号，12号にわたって「児童ノ遊戯ニ就テ」と題し，遊戯の問題を児童の遊戯を中心に総括して論じている。すなわち，主要課題を図式化して児童遊戯論の要点を見通しよく論じている。図Ⅰにその図を掲げる。その概要を本文の説明から抽出すると下記にまとめられる[26]。

上段が遊戯の4大理論，右列が児童遊戯の心理的内容，左列が児童遊戯の影響条件，円の両側には遊戯の2大特性，そして下段には児童遊戯の帰結としての実生活を配置している。このような図式表現による問題領域の定式化が倉橋の特徴であり，児童遊戯をわかりやすくよく整

理している。彼は「実際児童ノ間ニ行ハレテ居ル處ノ殆ンド無制限ナ多様ナル遊戯ノ種類ヲ観察シマス時ハ，必ズシモ之ヲ説明スルニ一個ノ説ヲ以テシナケレバナラヌトイフ事ハアリマセズ，又事実上色々ノ原因ガ複雑ニ交ッテ居ルコトヲ見ルノデアリマス。」[27] と述べ，観察に基づいて遊戯の原因を多面的に把握すべきだと主張していることが注目される。

倉橋はまた，「遊戯ノ本質ハ児童ノ自発ニ基クモノデナケレバナラヌト云フコトデアリマス。是レヤガテ，遊戯ト体操トノ区別デアリ，又真ノ遊戯ト形式ノミハ遊戯ニシテ而カモ実ハ遊戯デナイモノトノ別ノ分カルル所デアリマス。」[28] と児童遊戯の特質を明らかにするとともに「遊戯ノ問題ハ其ノ形式ヤ種類ノ改良ノミデハ無イノデアリマス。勿論其レモ大切ノコトハ，如何ニシテ児童ノ遊戯ニ対シテ自発的ナラシムルカ，其ノ自発ヲ如何ニ指導スベキヤト云フ点ニアリマス。」[29] と遊戯教育の在り方ついて注文をつけている。この考え方は倉橋の従来からの主張であるが，こゝではまだそれ以上具体的な指導法の展開までには至っていない。しかし倉橋は，東京女子高等師範学校附属幼稚園主事となった人であり，幼児教育の実際に関わったし，後には新庄よし子と共著で『日本幼稚園史』（東洋図書，昭和9年刊）を著わしている。

雑誌『児童研究』はわが国の遊戯教育との関係でみるとき次のような役割を果たしたものと考えられる。すなわち第1には以上にとりあげてきた三人の遊戯論は遊戯に関する理論的研究が少なかった時期に，いずれも遊戯を理論的に考察し意義づけようとしていたことである。それらは子供を子供として扱ういわゆる「子どもの発見」以後の西洋の近代教育思想の系譜を受け継いでいるものであり，そこでは遊戯が子供の成長発達にとって不可欠のものであり，大きな教育的価値をもつものであるとする認識があったわけだが，これらの著者たちはこの立場をとっていることが明らかである。

しかもそれらの遊戯論は遊戯が自発的活動であり，それは活動する者にとって快感を与えるものであるということをも明確にし，この性格を大切にしていたことである。これは実際の指導，例えば体操と遊戯の指導のあり方を問題にするとき，この遊戯の性格を保持することを強調するものとなった。

さらに，第2は雑誌『児童研究』はこのような遊戯論の他に，多数の遊戯関係記事を掲載していたが，それらは遊戯教育の実践の進歩を図ろうとするものであったことである。「研究実例」と分類されている教育現場からのカリキュラムやその実施報告がみられる。例えば森岡与之助執筆の「丹後与謝郡加悦町小学校遊戯実地案」（第5巻第6号）などを見ると当時の遊戯教育の実情がよく分かるものとなっている。また「紹介」と分類された記事の地方遊戯の報告にもまた興味深いものがある。山崎石峨執筆の「泉州地方に於ける遊戯」（第1巻第8号）などはその例である。さらに「雑録」の欄では遊戯に関する質疑・応答もとりあげられており（第1巻第1号），科学的根拠に基いた遊戯による児童教育の実践にかける創刊者達の意気込みとこの雑誌によせた現場指導者達の熱い期待がうかゞえる。この意味においても雑誌『児童研究』の遊戯教育に果たした役割は大なるものがあったといえよう。

4．明治30年代の体育界における遊戯に対する関心

『小学校教則大綱』（明治24年11月17日制定）で体操の中に遊戯を取り入れることを定めているが，このことに象徴されるように，明治20年代には遊戯に対する関心が芽生え，競争遊戯や唱歌遊戯を中心に1部行進遊戯も取り入れながら教育現場に広く採用され始めていた[30]。しかし，この時期には未だ遊戯の理論的な研究は殆どなされていなかった。これが明治30年代になると遊戯についての理論が求められるようになってくる。雑誌『児童研究』にみられるような論文はそれに応えるものであった。とくに明治33年8月20日改正の『小学校令』および明治33年8月21日制定の『小学校令施行規則』によって，現場においては遊戯の実際指導の問題が大きくでてきた。すなわち，明治24年11月

17日制定の「小学校教則大綱」第11条中には

尋常小学校ニ於テハ最初適宜ノ遊戯ヲナサシメ漸ク普通体操ヲ加ヘ男児ニハ便宜兵式体操ノ一部ヲ授クルヘシ

高等小学校ニ於テハ男児ニハ主トシテ兵式体操ヲ授ケ女児ニハ普通体操若クハ遊戯ヲ授クヘシ

とされていたが，この改正小学校令第10条中では，

尋常小学校ニ於テハ初ハ適宜ニ遊戯ヲ為サシメ漸ク普通体操ヲ加ヘ授クヘシ

高等小学校ニ於テハ普通体操ヲ授ケ遊戯ヲ為サシメ男児ニハ兵式体操ヲ加ヘ授クヘシ

と改められ，遊戯が低学年のみのもの，女子向きのものという認識から男女共通のもの，高学年に至るまでのものと広げられていることが重要である。

さらに，明治23年10月7日公布の「小学校令」に関連して幼稚園に関する規則は別に定められるとしながら，定められていなかった。

明治36年6月28日にようやく「幼稚園保育及設備規程」が定められた。

第六条　幼児保育ノ項目ハ遊戯，唱歌，談話及手技トシ左ノ諸項ニ依ルヘシ

一　遊嬉

遊嬉ハ随意遊嬉，共同遊嬉ノ二トシ随意遊嬉ハ幼児ヲシテ各自ニ運動セシメ共同遊嬉ハ歌曲ニ合ヘル諸種ノ運動等ヲナサシメ心情ヲ快活ニシ身体ヲ健全ナラシム

二　唱歌

（略）

三　談話

（略）

と保育の指導内容が「具体的に規定されたが，これが明治33年8月21日制定の「小学校令施行規則」の第九章「幼稚園及小学校ニ類スル各種学校」の規程にまとめられて

第百九十七条　幼児保育ノ項目ハ遊戯，唱歌，談話及手技トス

第百九十八条　遊戯ハ分テ随意遊戯及共同遊戯トス　随意遊戯ハ幼児ヲシテ各自ニ運動セシメ共同，歌曲ニ合ヘル諸種ノ運動等ヲ為サシメ心情ヲ快活ニシ身体ヲ健全ナラシメンコトヲ要ス

と改められたのである。

いずれにしても，明治30年代に入り，小学校令改正の時期と前後して，遊戯の扱いが大きく変わり，教育現場，すなわち幼稚園の保育問題もさることながら小学校の体操科としても，遊戯および遊戯教育への関心を高めざるを得なかったのである。明治34，35年には毎年20冊をこえる遊戯書が出版されていた[31]。こうした状況を考えるとき，雑誌『児童研究』が遊戯を研究対象とし，教育現場との連絡をとりながら遊戯教育の研究を進めようとした，つまり遊戯教育をリードする役割を果たしたことの意義は十分認められなければならない。

さらに明治30年代というものを考えるとき，明治37—38年の文部省の体操遊戯取調委員の調査結果である『体操遊戯取調報告』の問題がある。この報告は「所謂瑞典式体操ハ大体ニ於テ採用スヘキモノト決定」としたことで有名なものであるが，同時に遊戯を従来よりも大きくとり上げ，体育に位置づけていた点にも注目しなければならないものである。取調報告の「七　運動遊戯ニ関スル件」では，「運動遊戯ノ目的ハ児童ノ活動的衝動ヲ満足セシメ運動ノ自由ト快感トニ由リテ体操科ノ目的ヲ達シ特ニ個性及自治心ノ発達ニ資スルニアリ」と目的を明確にしていた。こうした遊戯の本質規定に基づく目的設定は，さきに考察した『児童研究』誌上の遊戯論と共通するものであり，とりわけ高島平三郎との係りがみてとられるところである。高島は，この取調委員の一人であり，運動遊戯の理論を担当したことは井口阿くり他共著『体育之理論及実際』（国土社，明治39年刊）の凡例によって明らかである。

この取調報告は「八　各学校体操科ニ関スル現行規程中改正ヲ要スル事項」においても「一，教授時数ハ大体現行ノマヽニテ変更ヲ要セザルベシ但シ中学校及師範学校（男子）ニ於テハ現今遊戯ヲ課スルノ規程ナキモ教授時数ノ三分ノ一以内ノ時間ヲ以テ遊戯ニ充ツルコト」とする

提案も行っていたのであって，これによってもこの取調報告がいかに遊戯を大きく位置づけていたかが知られる。こうした主張が可能になったのも，やはり遊戯が単に幼児期のものとのみせず，成長，発達の各段階においてそれぞれ意義をもったものとする遊戯に関する理論があったればこそといえるのであり，その点では雑誌『児童研究』に発表されたような遊戯に関する理論や学説が重要な役割を果たしたものと考えなければならない。

5．おわりに

本稿は，明治31年に児童心理学者が中心となって創刊した雑誌『児童研究』に発表された論文の中から遊戯論及び遊戯関係記事を抽出し，それらの論文の主張を明らかにするとともに，これらの論文の掲載を通してこの雑誌が果たした役割について考察してきた。

その結果明らかになった点を要約すると以下のようである。

1．遊戯を理論的に研究し，遊戯が子供の成長発達にとって不可欠なものであり，大きな教育的価値をもつものであるとした。これにより，遊戯の指導の在り方は児童の主体性をもたせたものとすることを強調し，体育においても従来からの号令・指示を基本とする体操指導と一線を画した指導法の必要を明らかにした。これは明治30年代において今迄欠けていた遊戯教育の理論を提供する役割を担ったものといえる。

2．現場教師の遊戯の調査研究やカリキュラムづくりを奨励し，それをこの雑誌に発表させるなどした現場教育者との交流を通して，遊戯による児童教育の実践の発展に積極的な役割を果たした。

3．文部省の体操遊戯取調報告（明治38年）に於て遊戯が大きく位置づけられているが，これには個人的には高島平三郎の影響が大きかったとみられるが，概していえば雑誌『児童研究』に発表されたような理論や学説が重要な影響を与えたと考えられる。

雑誌『児童研究』は以上の3点に明治30年代の教育界・体育界において果した役割が認められる。

明治30年代は児童遊戯が全国的に展開され定着していったときでもある。児童学を建設しようとするこれらの研究者，とくに心理学者たちが中心に展開したこれらの遊戯に関する研究成果は，遊戯教育の実際的指導法や現場教育者にも大きな影響を及ぼし，遊戯教育の発展に大きな支えとなったものと考えられる。

児童学研究の体育教育への役割にも注目すべきものが多いが，この点の考察は次の機会にゆずりたい。

附記

本研究にあたり，御指導頂いた中京大学体育学部木村吉次教授に深く感謝致します。

引用文献

1）横須賀薫編『近代日本教育論集』第5巻 国土社，昭和44年5月10日，p. 335.
2）『児童研究』第1巻第1号，東京教育研究所，明治31年11月3日.
3）4）元良勇次郎『児童研究』第1巻第1号，東京教育研究所，明治31年11月3日.
5）『児童研究』第1巻第1号，東京教育研究所，明治31年11月3日，p. 1.
6）同上，p. 3.
7）松本孝次郎『児童研究』第1巻第4号，教育研究所，明治32年2月3日，p. 5.
8）同上.
9）同上，p. 6.
10）松本孝次郎『児童研究』第2巻第1号，教育研究所，明治32年9月3日，p. 13.
11）同上，p. 16.
12）同上.
13）松本孝次郎『児童研究』第6巻第1号，日本児童研究会，明治36年1月31日，p. 3.
14）同上，p. 7.
15）高島平三郎『児童研究』第7巻第10号，

日本児童研究会，明治 37 年 10 月 25 日，p. 13.

16）同上，p. 14.

17）同上.

18）同上，p. 16.

19）同上，p. 17.

20）同上，p. 20.

21）同上，p. 21.

22）同上，p. 25.

23）同上，p. 27.

24）高橋春子「高島平三郎の遊戯論に関する一考察」中京大学体育学論叢，第 35 巻第 2 号，pp. 19～20.

25）同上，p. 21.

26）倉橋惣三『児童研究』第 13 巻第 9 号，日本児童研究会，明治 43 年 3 月 25 日，pp. 301～302.

27）同上，pp. 306～307.

28）倉橋惣三『児童研究』第 13 巻第 12 号，日本児童研究会，明治 43 年 6 月 25 日，p. 421.

29）同上.

30）高橋春子「明治 20 年代の遊戯教育についての一考察」中京体育学研究，第 20 巻第 2・3 合併号，昭和 55 年，p. 45.

31）岸野雄三，竹之下休蔵『近代日本学校体育史』日本図書センター，昭和 34 年 7 月 5 日，p. 58.